

荒川区保健所における服薬支援 (DOTS) 事業の取り組み



荒川区保健所
保健予防課 堀 裕美子

荒川区の状況

荒川区は東京23区の東北部に位置し、23区中3番目に小さく、南部の台東区と隣接する地域の一部に、日雇い労働者等が多く寝泊りしている簡易宿泊所等が点在する山谷地域を含んでいる。

荒川区の総人口は199,916人（平成21年1月1日現在）で、区内の外国人登録者数は15,709人（平成21年1月1日現在）、区内の総人口に占める外国人の割合は7.9%で、23区中3番目に多い状況にある。また、高齢化率は22.5%で、全国平均より高く、超高齢社会となっている。

結核に関する業務は感染症全般も担当しながら、医師1名、保健師3名、事務4名で対応している。

荒川区の結核について

荒川区の平成19年の新登録結核患者数78人、罹患率37.9（人口10万対）で、全国518保健所管轄地域中20番目と高率であった。

結核管理図からみた荒川区の結核の状況は、新登録結核患者の60歳以上の割合が41.9%（平成19年全国68.0%）と少なく、年末に登録されている全活動性結核患者中の生活保護割合が18.5%（平成19年全国4.9%）と多いという特徴と、超多剤耐性結核で治療期間が5年を超える患者が2人いる影響から、平均の全結核治療期間が10.5ヵ月と長くなるという傾向がある。

また新登録結核患者のうち外国人が5人6.4%（平成19年全国3.3%）で、5名のうち20代の患者が4

名であった。日本語学校の健診で早期発見される例も少なくない。高ま延国から留学のため来日する若い外国人が増え、生活環境の変化から来日後に発症し、結核患者として登録されるという、二つの影響があると考えられる。

荒川区保健所の服薬支援事業の経過

平成16年度に60歳未満の住所不定生活保護受給者と外国人を中心とした対象者を試行的に行い、平成17年度から本格的に実施している。

服薬支援事業の対象は、登録された結核患者全員に対し、東京都服薬支援のためのリスクアセスメント票を用いた評価と保健師の面接の結果をふまえ、所内のDOTSカンファレンスにおいて決定している。そして、このカンファレンスの結果を基に患者と服薬支援の方法を話し合っている。

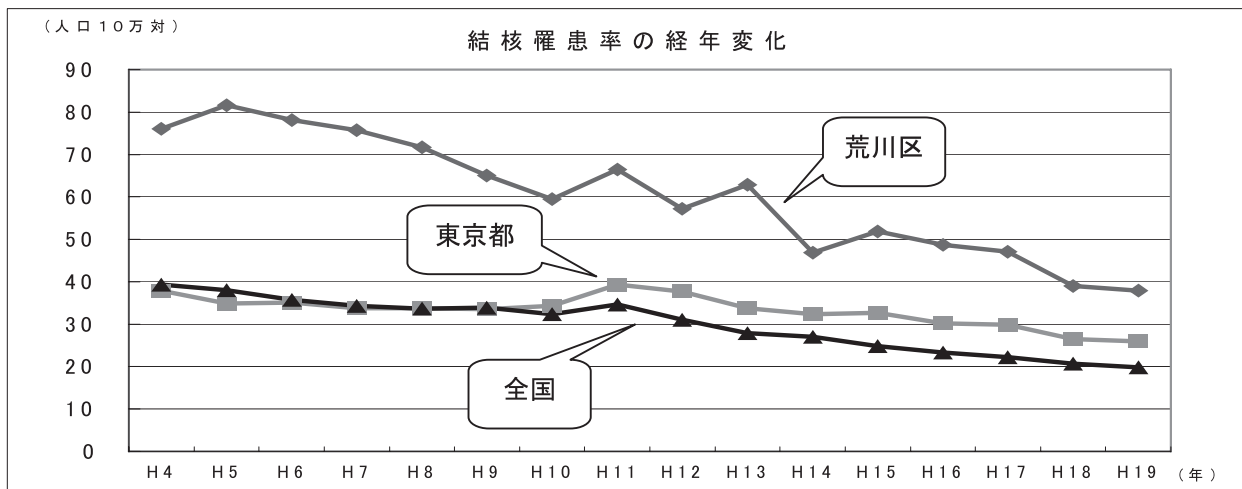
また、服薬支援の治療結果については、所内で行うコホート会議にて、菌検査の確認と治療成績の判定を行っている。

服薬支援の基本は保健師による面接

服薬支援の方法は個人と地域資源の状況に合わせて決めるため、多岐にわたっている。

服薬支援の基本は保健所における保健師による面接であり、確実な内服の支援を目指すとするれば、住所不定で生活保護受給者の場合は、毎日のDOTSによる服薬支援が有効である。

時間が拘束される仕事や通学の場合、毎日保健所へ来所し、服薬を確認するのは難しい。そのた



めりスク評価の結果や本人の生活の状況に合わせ、訪問、電子メール、電話、内服後の空袋の郵送による確認、学校や薬局でのDOTS、訪問看護によるDOTSなどを組合せた方法で平成19年42人、平成20年42人に実施している。



DOTSへの理解があるからこそ戻ってきた封筒

学校や薬局等でのDOTSの課題

調剤薬局で薬を受け取っていても自分が結核であることを多くの人に知られたくない、個人情報を知られたくないなどの理由から、実施数は2人と少なくなっており、空袋の郵送による確認が増加する傾向にある（平成21年1月現在7人）。

患者と面接できる時間を大切に

間接的な方法（空袋の郵送による確認、電話による支援、服薬手帳の活用など）では患者本人と直接会う機会が少なくなるため、患者と面接できる時間を大切にしている。実際の確認方法としては、患者本人に保健所の住所が書かれ、切手が貼ってある封筒を渡すところから始まる。保健師は、1～2週間毎に送られてくる封筒内の薬の空袋数を確認すると同時に、直ちに本人へ労をねぎらう電話をしている。電話では、生活の様子や受診の様子を確認し、不安をできるだけ解消できるよう支援を続け、もし飲み忘れがあったとしても、ありのままを話してもらえよう関係を築けるよう心がけている。特に日本語が不慣れな外国人の場合においては、面接時には通訳を活用したり、できるだけ日本語が分かる人と一緒に保健所に来所してもらうようお願いしている。

空袋の郵送による確認の事例

年齢：65歳

性別：男性

病名：肺結核

菌検査：喀痰塗抹陰性、培養陽性、全感受性あり



患者との面接を大切に

治療内容：INH・RFP・EBにて9ヵ月

職業：警備員

家族構成：一人暮らし

中断リスク要因：服薬支援者なし

経過：警備員の仕事のため保健所への来所が難しい状況から、空袋の郵送による確認を導入した。2週間に1回、計14回の空袋の郵送で確認を終了。途中、封筒がなくなる前には、ご本人が不在であっても訪問し、郵便受けに封筒と手紙を入れ、支援を続けた
患者さんの手紙：「初め自分でできると思っていたのですが、なんとか薬を飲みきることができました。ありがとうございました」

経過観察時の様子：電話をかけると「調子もよく大丈夫です」と元気な声が聞かれた

今後の課題

荒川区では、人的資源や予算が十分でない中で試行錯誤し、取り組んだのが緩やかなタイプのDOTS（月1～2回の面接、空き袋の郵送や電話など）であった。

保健所の役割は、個人の生活状況や病状に応じた服薬支援の実施により、治療環境を整え、患者の治療中断を予防し、確実な治療による感染拡大の防止と、耐性菌の発生防止にあると考えている。

都市部の生活では、生活時間や生活習慣が異なる人が混在して生活しており、患者本人に合わせた服薬支援を模索していく必要がある。全ての患者に対応するためには、保健所だけのマンパワーでは足りない。現在の支援サービス（訪問看護や薬剤の一包化など）の中には、患者本人の自己負担が生じる場合もある。自己負担が生じない形の支援方法を検討し、地域の資源を開発し、どう活用していけるかが、今後の課題である。